

[論 文]

共同性の精神的基盤と社会階層

——他者への信頼・弱者への配慮・不満・アノミー——

小 林 久 高

「他者への信頼」と「弱者への配慮」といった態度は社会の共同性を支える重要な2つの態度と考えられる。これら2つは経済的な階層と関連しており、階層が高くなるほど他者への信頼は強まり、弱者への配慮は弱まる。一方、他者との親密な交際から測定される社会関係もまた他者への信頼と弱者への配慮に関連している。すなわち、親密な社会関係を築いているとき、階層の違いに関わらず、他者への信頼と弱者への配慮は強められる。

生活に関わる満足度もまた経済的な階層に関わっており、貧しい階層ほど不満が強い。この意識も社会関係に関連しており、階層の違いに関わらず、親密な社会関係は不満を低める効果をもっている。

本論文ではさらに、個人的な意味での「豊かさのアノミー」を経験的に測定する指標が提案される。この指標をもとにした測定によると、アノミーは貧しい階層よりも豊かな階層でより強い。また、この指標を用いることによって、貧しい階層のアノミーは他者への低い信頼に関連すること、豊かな階層のアノミーは他者への高い信頼に関連することが明らかにされる。弱者への配慮を欠いた豊かな階層の「おめでたきアノミー」は、他者への不信に関連した貧しい階層の「シニカルなアノミー」と対照的な意味合いをもっているのである。

キーワード：社会階層，社会関係，親密性，共同性，他者への信頼，弱者への配慮，不満，アノミー

1. はじめに

プラトンの『国家』は読者に複雑な気持ちを抱かせる著作である。あるところを読むと、「なるほど」と膝を叩きたくなる。しかし、別のところを読むと「それは危険だ！」と思わず叫びたくなる。『国家』の面白さはこの理想と危険のないまぜの姿にあるのかもしれない。ソクラテスはグラウコンにこう話す。「では、楽しみと苦しみが共になされて、できるかぎりすべての国民が得失に関して同じことを等しく喜び、同じことを等しく悲しむような場合、この苦楽の共有は、国を結合させるのではないかね?」「まったくその通りです」とグラウコン。「これに反して、そのような苦楽が個人的なものになって、国ないしは国民に起こっている同じ状態に対して、ある人々はそれを非常に悲しみ、ある人々はそれを非常に喜ぶような場合、この苦楽の私有化は、国を分裂させるのではないかね?」「もちろんです」(Plato, 360 BC=1979 上:373)。

話は、プラトンの考える幾分全体主義的な国家についての説明の中で展開されるので、これを読んですぐさま、「その通り!」と叫ぶわけにはいかない。だが、彼のいうように、社会は、ともに喜び合う気持ちやともに信頼しあう気持ちによって支えられていることも事実だろう。ここではこれら社会を支える気持ちのなかで「他者への信頼」と「弱者への配慮」という2つの気持ちに注目しよう。他者へのある程度の信頼なくして、社会は成り立たない。弱者への配慮の気持ちがなくなれば、社会は完全に1つの競争的なアソシエーションになってしまう。おそらくそのような社会は、大げさにいえば、ホプズズのいわゆる「孤独で貧しく陰悪で残忍で短い」社会となってしまうに違いない(Hobbes, 1651=1954 I:204)。本稿ではまず、この「他者への信頼」と「弱者への配慮」がどのような社会的基盤に関わるのかを、社会階層に焦点を置いて考えてみる。

他者への信頼と弱者への配慮の分析の後、議論の焦点は不満とアノミーへと移動する。そこでは、生活上の満足や不満が階層とどう関わっているかが明ら

かにされ、デュルケムのいわゆる「豊かさのアノミー」の基盤が検討されることになる。他者への信頼と弱者への配慮が社会の存立基盤そのものに関わっているとすれば、不満やアノミーは現に存在する社会に関わっていると見える。本稿では、前者を基本的な問題、後者を派生的な問題ととらえているのである。

以下に展開される議論は、信頼や配慮を生み出す決定要因、不満やアノミーを生み出す決定要因を明らかにするものではない。それらは数多くの要因によって生み出される。議論はむしろ、他者への信頼や弱者への配慮、生活上の不満やアノミーの大きさを「わずかに」左右する要因に注目して進められる。それはデータに潜むかすかな地下水脈を探り出すことにほかならない。その意味で、本稿で提示される結論は、決定的なものというよりも、1つの仮説と考えるべきである。

時代は大きく変化している。市場万能主義が跋扈し、競争原理は福祉や公教育にまで及んでいる。そんな中、他者への信頼や弱者への配慮、さまざまな寛容性はどんどん失われていくのではないかと考える者は筆者だけではないだろう⁽¹⁾。本稿はこういった問題関心の下、社会を支える諸意識と階層との関係について考えるものである。

2. 他者への信頼・弱者への配慮と社会的属性

2.1 他者への信頼と弱者への配慮の指標

SSM 2005 には、他者への信頼や弱者への配慮を指し示すいくつかの質問がある。表1にはそれらの単純集計結果がまとめられているが、この表を見ていると少々驚かされる。他者への信頼に関する「たいていの人は自分のことだけを考えている」という質問に対しては、過半数が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えているのである。他者への信頼が一般的ではないことをこの結果は示している。

格差についての2つの質問の回答も興味深い。多くの者は格差が広がるのは

表1 他者への信頼と弱者への配慮に関する質問と回答の分布

		そう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらとも いえない	どちらかと いえばそう 思わない	そう思 わない	合計	度数
他者 信頼	たいていの人は信用できる	5.2	25.0	38.6	15.6	15.5	100.0	2711
	機会があれば、たいていの人は自分のために他人を利用する	7.4	24.3	41.3	14.7	12.4	100.0	2625
	たいていの人は自分のことだけを考えている	16.0	40.4	28.2	9.3	6.1	100.0	2706
弱者 配慮	チャンスが平等にあたえられるなら、競争で貧富の差がついてもしかたがない	25.0	48.5	—	15.5	11.0	100.0	2617
	今後、日本で格差が広がってもかまわない	2.0	4.7	19.7	28.2	45.4	100.0	2694

よくはないが、チャンスが平等なら貧富の差もしかたがないと考えているのである。この格差に関する2つの質問の回答をここでは弱者への配慮を表すものとする。というのは、弱者への配慮の強い者は、おそらく、格差が広がることをよしとしないし、「チャンスが平等なら格差拡大もしかたがない」などとシンプルに考えたりもしないと思われるからだ。

これらの質問をもとに、以下の分析で用いる2つの指標を構成しよう。まず、他者への信頼を表す3つの質問「たいていの人は信用できる」「機会があれば、たいていの人は自分のために他者を利用する」「たいていの人は自分のことだけを考えている」の回答を主成分分析にかけ、第1主成分の因子得点を他者信頼スコアとすることにする（寄与率は51.52%）。次に、弱者への配慮に対応する2つの質問「チャンスが平等にあたえられるなら、競争で貧富の差がついてもしかたがない」「今後、日本で格差が広がってもかまわない」を主成分分析にかけ、第1主成分の因子得点を弱者配慮スコアとする（寄与率は63.73%）。他者信頼スコアと弱者配慮スコアの相関は0.068である。

2.2 他者への信頼・弱者への配慮と社会的属性との関係

さて、これら2つの指標を用いて、実際に、他者への信頼、弱者への配慮が

社会階層とどう関わっているのかを分析していこう。まず、信頼・配慮と種々の社会的属性の関係について明らかにしておく。

表2には、性別、年齢、学歴、世帯収入、財産、職業といった社会的属性それぞれについて、他者信頼スコアおよび弱者配慮スコアの平均が示されている⁽²⁾。ここから読み取れるのは、他者への信頼や弱者への配慮がさまざまな社会的属性に関係しているということである。性別に関しては、女性のほうが男性よりも他者を信頼する程度が高く、弱者への配慮も強いという傾向が見られる。年齢については、加齢とともに信頼が高まり50代でピークを迎えるが、その後、信頼はやや低くなるという関係が見て取れる。年齢と配慮の関係も年齢と信頼の関係とほぼ同様である。学歴と信頼についてはきちんとした関係は見られないが、おおむね学歴が高いほど信頼は強くなる。学歴と配慮に関して

表2 社会的属性ごとにみた他者信頼・弱者配慮の平均

		他者信頼				弱者配慮			
		平均	度数	標準偏差	p	平均	度数	標準偏差	p
性別	男	-0.077	(1256)	0.980	0.000	-0.174	(1256)	1.009	0.000
	女	0.073	(1330)	1.013		0.169	(1291)	0.962	
年齢	20代	-0.164	(296)	0.991	0.001	-0.043	(299)	1.024	0.073
	30代	-0.064	(470)	0.957		-0.085	(462)	1.004	
	40代	-0.043	(513)	0.959		-0.011	(522)	1.051	
	50代	0.104	(643)	1.008		0.085	(632)	0.972	
	60代	0.052	(664)	1.044		0.007	(632)	0.967	
学歴	中学	-0.092	(411)	1.043	0.086	0.080	(378)	0.996	0.000
	高校	0.003	(1436)	0.991		0.083	(1425)	1.000	
	大学	0.044	(738)	0.991		-0.198	(743)	0.974	
世帯収入	低	-0.107	(529)	1.058	0.001	0.102	(496)	0.976	0.000
	中	-0.001	(621)	1.001		0.043	(628)	0.966	
	高	0.124	(512)	0.982		-0.172	(517)	1.004	
財産	低	-0.145	(663)	1.011	0.000	0.052	(632)	1.035	0.000
	中	0.012	(527)	0.966		-0.006	(518)	0.965	
	高	0.071	(594)	0.983		-0.175	(595)	0.995	
職業	専門	0.081	(292)	1.000	0.009	-0.104	(297)	0.947	0.000
	管理	0.136	(144)	1.060		-0.409	(146)	1.051	
	ホワイト	0.042	(620)	0.918		-0.069	(608)	0.981	
	ブルー	-0.095	(704)	0.986		0.113	(699)	1.013	
	農業	-0.096	(104)	1.162		-0.013	(101)	1.073	

は、学歴が高まるほど弱者への配慮は低くなるという関係が見られる。

世帯収入や財産（配偶者と合算した資産総額）は他者信頼、弱者配慮に大きく関わっている。収入や財産が多いほど他者への信頼感は強くなり、弱者への配慮は弱くなるのである。職業については、「農業・ブルー」と「専門・管理・ホワイト」にまとめて考えたほうがよさそうだ。前者は信頼が低く後者は信頼が高い。また、前者は弱者への配慮が強く後者は弱い。

他者への信頼・弱者への配慮と社会的諸属性との全体的な関係を見るために、信頼および配慮を従属変数とする回帰分析を行ってみよう。財産と世帯収入との相関は 0.300、財産と年齢との相関は 0.304 と高いため、財産は回帰モデルの独立変数から除外することにする。

これらの分析結果は表 3 と表 4 に表されている。決定係数の低さを見れば、これらが信頼や配慮の程度を説明するよいモデルとはいえないが、ここでの関心の焦点はモデルの説明力ではなく、それぞれの偏回帰係数の値と方向にある。

まず、表 3 からは、年齢、世帯収入が信頼を高めることが確認できる。職業についても、ホワイトであることは農業に比べて信頼を高めている⁽³⁾。表 4 か

表 3 他者への信頼の回帰分析

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t	p
(定数)	-0.865	0.254		-3.408	0.001
性別 (女 0)	-0.110	0.060	-0.055	-1.832	0.067
年齢	0.009	0.003	0.112	3.696	0.000
教育年数	0.008	0.012	0.022	0.641	0.522
世帯収入	0.000	0.000	0.090	2.977	0.003
専門	0.239	0.153	0.088	1.557	0.120
管理	0.236	0.163	0.066	1.444	0.149
ホワイト	0.307	0.140	0.143	2.187	0.029
ブルー	0.113	0.135	0.056	0.840	0.401
N	1199				
R ² 乗	0.034				
p	0.000				

職業ダミー基礎

農業

表 4 弱者への配慮の回帰分析

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t	p
(定数)	0.577	0.202		2.849	0.004
性別 (女 0)	-0.362	0.059	-0.180	-6.147	0.000
年齢	0.004	0.003	0.052	1.748	0.081
教育年数	-0.027	0.012	-0.077	-2.329	0.020
世帯収入	0.000	0.000	-0.086	-2.915	0.004
専門 管理 ホワイト	-0.169 -0.135 -0.199	0.093 0.113 0.071	-0.063 -0.038 -0.093	-1.818 -1.193 -2.788	0.069 0.233 0.005
農業	-0.057	0.130	-0.013	-0.441	0.659
N	1196				
R ² 乗	0.070				
p	0.000				

職業ダミー基礎 ブルー

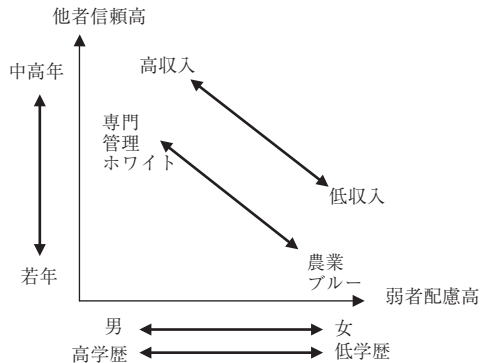


図 1 他者信頼・弱者配慮と社会的属性の関係図

らは、性別、教育年数、世帯収入が弱者への配慮を高めたり低めたりすることが確認できる。また、職業については、ブルーであることに比べ、ホワイトであることは弱者への配慮を弱めることがわかる。これらのことをまとめると、信頼・配慮と社会的属性について、図 1 のような関係性が浮かび上がる⁽⁴⁾。

3. 経済的豊かさと他者への信頼・弱者への配慮

3.1 経済的豊かさの指標

さまざまな社会的属性が他者への信頼や弱者への配慮に関わっていることが確認できた。それらの諸属性の中で、世帯収入や財産といった経済的な意味での豊かさは、信頼と配慮双方に比較的強く関連していた。ここではこの経済的な豊かさについての統一的な指標を作成し、それと信頼、配慮の関係を見ていくことにする。

まず、経済的な豊かさを意味する指標を作成するために、世帯収入と財産を主成分分析にかけ、第1主成分の因子得点を「経済地位スコア」とすることにしよう。第1主成分の寄与率は、65.0%となっており、経済地位スコアと世帯収入および財産との相関はともに0.806である。この新しい指標は収入だけでなく、財産を含めた「お金持ちさ」を表すものである。

表5にはこの指標と他者への信頼、弱者への配慮との相関が示されている。相関は大きいとはいえないが、経済的な地位が高いほど、他者への信頼は高く

表5 経済地位・世帯収入・財産と他者信頼・弱者配慮の相関

	他者信頼			弱者配慮		
	相関	p	N	相関	p	N
経済地位	0.085	0.002	(1332)	-0.142	0.000	(1308)
世帯収入	0.089	0.000	(1662)	-0.121	0.000	(1641)
財産	0.061	0.010	(1784)	-0.096	0.000	(1745)

表6 経済階層別の他者信頼・弱者配慮の平均

経済階層3分	他者信頼			弱者配慮		
	平均	N	標準偏差	平均	N	標準偏差
上	0.071	(448)	0.986	-0.232	(450)	0.971
中	0.022	(439)	0.975	-0.023	(437)	0.982
下	-0.150	(445)	1.030	0.094	(421)	0.978
合計	-0.019	(1332)	1.001	-0.057	(1308)	0.986
p	0.003			0.000		

なり弱者への配慮は低くなることが読み取れる。さらに、経済地位スコアに基づいて経済階層を上中下に3分割し（経済階層3分）、この階層と信頼・配慮の関係を見たものが表6である。表には、豊かな階層ほど他者への信頼が大きいこと、貧しい階層ほど弱者への配慮が強いことがきれいに示されている。

3.2 共感のむずかしさ

経済階層と信頼や配慮との関係についてのこれまでの分析結果は、われわれをある種のやるせない気分へと落とし入れる。経済的に豊かな者は他者を比較的信頼している。それは、彼らの幸福な性質を示しているといえる。しかし、彼らの経済的な弱者に対する視線に着目するとき、なんともいえない気持ちになる。彼らはどちらかというと、競争社会からの落伍者に対して批判的な態度をとるのである。

一方、貧しい人たちは、そういった敗者に対して好意的である。「機会が平等ならば結果的に不平等が生じてもしかたがない」などというやや乱暴な見解に彼らがかみすることは少ない。しかし、他者への信頼に基づいて彼らが弱者に暖かい視線を投げかけるのかというと、それは少し違う。彼らの他者への信頼は豊かなものの他者への信頼よりも低いのである。

こういったことがらは、「自身の置かれた状況を越えての共感の難しさ」を示しているかのようなものである。豊かな者は、他者への高い信頼を示しながらも、弱者への暖かい視点に欠ける。だとすると、彼らの信頼というのはただのおめでたさではないか。彼らの信頼は「だまされても生きていける豊かさという前提」に支えられているだけであって、「人間一般に対する深い愛情」からは程遠いものではないか。一方、貧しい者は、弱者への配慮を示す。しかし、それが信頼にもとづかない配慮を意味するならば、彼らの示す弱者への配慮とは、弱者一般への配慮というよりも自分への配慮でしかないのではないか。

このように、豊かな者、貧しい者双方に「個人的な立場を超えた共感の欠如」が垣間見えることが、われわれをやるせない気分へと落とし入れるのである。しかし、このように感じながらも分析を進めていくうちに、ある重要な変

数が浮かび上がってくる。それは「親密な社会関係」とでも名づけられる変数である。

3.3 社会関係の指標

SSM 2005 には「過去 1 年間に、あなたはだれかを自宅に招いたことがありますか。あてはまる人の番号に、いくつでも○をしてください」という質問が設けられており、それに対して「親せきの人、職場や仕事関係の人、近所の人、学校時代の友人、同じサークルや団体に加入している人、その他の友人や知人、だれも招いたことがない」という回答カテゴリーが用意されている。この回答カテゴリーの中の「だれも招いたことがない」以外につけられた○の数は、調査対象の親密な交際の広がりに対応している⁶⁾。この親密な交際の広がりここでは調査対象の社会関係の大きさの1つの指標と考え、回答カテゴリーのなかでつけられた「だれも招いたことがない」以外の○の数を「社会関係スコア」とすることにしよう。社会関係スコアと経済地位スコアの相関は 0.155 ($p=0.00$) となっている。

3.4 他者への信頼・弱者への配慮と経済地位・社会関係

はたして社会関係は、他者への信頼や弱者への配慮に関係しているのだろうか。表7はこのことを明らかにするために、経済地位・社会関係と信頼・配慮との相関を示したものである。表から、単相関で見ると、社会関係は信頼と

表7 経済地位・社会関係と他者信頼・弱者配慮との相関

		相 関		偏 相 関	
				社会関係制御	経済地位制御
		経済地位	社会関係	経済地位	社会関係
他者信頼		0.085	0.071	0.070	0.077
	p N	0.002 (1332)	0.000 (2586)	0.013 (1270)	0.006 (1270)
弱者配慮		-0.142	0.027	-0.149	0.062
	p N	0.000 (1308)	0.174 (2547)	0.000 (1270)	0.027 (1270)

は正に相関するものの、配慮と相関するとはいいにくいことがわかる。しかしながら、経済地位をコントロールして社会関係と弱者への配慮の相関を見ると、両者の間には小さいながらも正の相関があることがわかる。社会関係は、他者への信頼にも弱者への配慮にもプラスに作用するのである⁽⁶⁾。

信頼と配慮の具体的な値について、経済階層と社会関係を組み合わせて見た

表 8 経済階層・社会階層別の他者信頼・弱者配慮の平均

経済階層 3分	社会関係 2分	他者信頼			弱者配慮		
		平均	N	標準偏差	平均	N	標準偏差
上	広狭	0.147 -0.032	(256) (192)	0.962 1.011	-0.192 -0.283	(255) (195)	0.944 1.006
	合計	0.071	(448)	0.986	-0.232	(450)	0.971
中	広狭	0.049 -0.012	(248) (191)	1.001 0.942	0.052 -0.119	(246) (191)	0.938 1.029
	合計	0.022	(439)	0.975	-0.023	(437)	0.982
下	広狭	-0.082 -0.194	(175) (270)	1.023 1.033	0.146 0.058	(173) (248)	0.942 1.003
	合計	-0.150	(445)	1.030	0.094	(421)	0.978
合計	広狭	0.052 -0.093	(679) (653)	0.995 1.003	-0.016 -0.100	(674) (634)	0.951 1.020
	合計	-0.019	(1332)	1.001	-0.057	(1308)	0.986

表 9 経済階層・社会階層別、他者信頼・弱者配慮平均に関する分散分析表

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	
他者信頼	主効果	(結合された) 経済階層 3分 社会関係 2分	16.155 9.194 4.441	3 2 1	5.385 4.597 4.441	5.424 4.630 4.473	0.001 0.010 0.035
	2次交互作用	経済階層 3分 * 社会関係 2分	0.770	2	0.385	0.388	0.679
	モデル		17.201	5	3.440	3.465	0.004
	残差		1316.553	1326	0.993		
	合計		1333.754	1331	1.002		
弱者配慮	主効果	(結合された) 経済階層 3分 社会関係 2分	27.256 24.975 4.328	3 2 1	9.085 12.487 4.328	9.533 13.103 4.541	0.000 0.000 0.033
	2次交互作用	経済階層 3分 * 社会関係 2分	0.475	2	0.238	0.249	0.779
	モデル		28.710	5	5.742	6.025	0.000
	残差		1240.793	1302	0.953		
	合計		1269.503	1307	0.971		

ものが表8であり、その分散分析の結果が表9に示されている。これらの表からは、どの経済階層においても、社会関係が信頼や配慮を高める効果を持っているということがわかる。

豊かな階層では他者への信頼が高く、貧しい階層では低い。社会関係の広がり、そのどちらに対しても、信頼をより高める効果をもっている。豊かな階層では弱者への配慮が低く、貧しい階層では高い。社会関係の広がり、そのどちらに対しても、配慮をより高める効果をもっているのである。このような結果を見て、すでに述べた絶望的な気分が少しやわらげられるのは、筆者だけではなからう。

4. 生活不満と社会階層

4.1 生活不満と社会的属性変数との関係

他者への信頼と弱者への配慮といった社会の基礎原理に関わる意識の検討はこれぐらいにして、次に、不満やアノミーと社会階層との関係の検討に移ろう。調査には一般的な生活満足度を探る質問があり、その回答の分布が表10に示されている。これまで日本でなされてきた多くの研究と同様、分布は満足のほうへの偏りを示している。

ここではこの生活満足度について、「満足」に1点、「どちらかといえば満足」に2点、「どちらともいえない」に3点、「どちらかといえば不満」に4点、「不満」に5点を与え、それを「生活不満」の指標とする。

不満についても、まず、社会的な諸属性と不満の関係の検討をおこなってお

表10 生活満足度の質問と回答の分布

	満足している	どちらかといえば満足している	どちらともいえない	どちらかといえば不満である	不満である	合計	度数
あなたは生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。	28.2	39.8	18.9	8.8	4.2	100.0	5712

表 11 社会的属性ごとにみた不満平均

		平均値	度数	標準偏差	p
性別	男	2.333	(2646)	1.102	0.000
	女	2.106	(3066)	1.045	
年齢	20代	2.181	(624)	1.006	0.046
	30代	2.134	(1047)	1.037	
	40代	2.248	(1105)	1.051	
	50代	2.256	(1416)	1.100	
	60代	2.208	(1520)	1.128	
学歴	中学	2.431	(948)	1.235	0.000
	高校	2.233	(3197)	1.070	
	大学	2.029	(1564)	0.951	
世帯収入	低	2.498	(1205)	1.216	0.000
	中	2.138	(1364)	1.022	
	高	1.924	(1081)	0.884	
財産	低	2.474	(703)	1.210	0.000
	中	2.158	(557)	0.995	
	高	1.963	(618)	0.897	
職業	専門	1.963	(620)	0.884	0.000
	管理	1.927	(287)	0.818	
	ホワイト	2.176	(1404)	1.000	
	ブルー	2.388	(1565)	1.136	
	農業	2.281	(235)	1.093	

こう。表 11 には、性別から職業にいたる社会的属性と不満との関係が示されている。それぞれの属性と不満との関係を個別的に見るならば次のようになる。性別については、男性は女性よりも不満が大きいといえる。年齢に関しては、年齢が高くなるとともに不満は高まり、50代のピーク以後不満が低くなるという関係が見られる。学歴については、高い学歴の保持者ほど不満が小さいという傾向がある。

世帯収入や財産といった経済的な豊かさとの関係でいえば、不満は豊かな層ほど小さくなる。職業については、ブルーカラーの不満がもっとも大きく、農業の不満がそれに次ぐ。専門・管理の不満はそれらに比べて低く、ホワイトカラーの不満が中間に位置する。

社会的属性と不満の関係を、総合的に検討するためにおこなった回帰分析の結果が表 12 に示されている。平均の検討において関連の見られたいくつかの

表 12 不満の回帰分析

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t	p
(定数)	2.685	0.146		18.423	0.000
性別 (女 0)	0.152	0.043	0.072	3.580	0.000
年齢	0.000	0.002	0.002	0.110	0.912
教育年数	-0.014	0.008	-0.038	-1.672	0.095
世帯収入	0.000	0.000	-0.174	-8.627	0.000
専門 管理	-0.223	0.069	-0.077	-3.255	0.001
ホワイト	-0.223	0.085	-0.057	-2.633	0.009
農業	-0.094	0.050	-0.042	-1.865	0.062
	-0.077	0.094	-0.016	-0.815	0.415
N	2632				
R ² 乗	0.058				
p	0.000				

職業ゲーム基礎 ブルー

属性の回帰係数は小さくなるが、性別、世帯収入、職業といった属性が不満に効果を与えていることは、この表からも確認できる。

4.2 不満と経済地位・社会関係との関係

他者への信頼と弱者への配慮についての検討のときと同様、不満についても、経済地位や社会関係との関係を中心に、さらに検討を進めよう。表 13 には、経済地位ならびに社会関係と不満の相関が示されている。ここから経済的に豊かな者ほど不満が小さいことが読み取れる。また、広い社会関係を持っている者ほど不満が小さいこともわかる。

経済地位と社会関係の不満へのこういった関わりを見ていると、社会関係

表 13 経済地位・社会関係と不満の相関

		相 関		偏 相 関	
		経済地位	社会関係	社会関係制御	経済地位制御
				経済地位	社会関係
生活不満	p	-0.235	-0.146	-0.217	-0.122
	N	0.000	0.000	0.000	0.000
		(1393)	(2814)	(1393)	(1393)

は、信頼や配慮の場合と同様の働きをするのではないかという考えが生まれてくる。すなわち、どの経済階層においても「社会関係の豊かさ」が不満を緩和することになっているという予想が立てられるのである。

このことを検討するために、経済階層別に社会関係の広い者と狭い者の不満の程度を示したものが表 14 である。この表 14 ならびにその分散分析の結果を示す表 15 を見ると、予測に違わず、社会関係の広さは、どの階層においても不満を低める働きをもっていることがわかる。豊かな社会関係は、信頼を高め、配慮を強めるだけでなく、不満を低める効果ももっているのである⁽⁷⁾。

表 14 経済階層・社会関係別不満平均

経済階層 3 分	社会関係 2 分	生活不満		
		平均	N	標準偏差
上	広	1.767	(262)	0.851
	狭	2.010	(204)	0.854
	合計	1.873	(466)	0.860
中	広	1.988	(259)	0.946
	狭	2.192	(198)	1.004
	合計	2.077	(457)	0.976
下	広	2.375	(184)	1.171
	狭	2.622	(286)	1.236
	合計	2.526	(470)	1.216
合計	広	2.007	(705)	1.005
	狭	2.317	(688)	1.100
	合計	2.160	(1393)	1.064

表 15 経済階層・社会関係別、不満平均に関する分散分析表

			平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
不 満	主効果	(結合された)	120.574	3	40.191	38.371	0.000
		経済階層 3 分	87.371	2	43.685	41.707	0.000
		社会関係 2 分	18.107	1	18.107	17.287	0.000
	2 次交互作用	経済階層 3 分 * 社会関係 2 分	0.130	2	0.065	0.062	0.940
	モデル		122.509	5	24.502	23.392	0.000
	残差	1452.792	1387	1.047			
	合計	1575.301	1392	1.132			

5. アノミーと社会階層

5.1 アノミーの指標

さて、最後にアノミーの検討に向かおう。アノミーの概念はやや多義的であるが、ここで検討するアノミーはいわゆる「豊かさのアノミー」に関わっている。それは単なる無規制状態・無規範状態を意味するものではなく、欲望の無規制状態、欲望の肥大状態を意味する。一般的な無規制状態を意味する「アノミー」と同様、欲望の無規制状態を意味する「豊かさのアノミー」も自殺論におけるデュルケムの議論に端を発する。彼の現代社会論的な議論は、豊かさのアノミーの危険な帰結について警告するのである（Durkheim, 1897）。

デュルケムが社会一般の豊かさのアノミーについて議論を展開したのに対し、マートンが注目したのは、その階層との関わりである。彼は、アメリカ社会でよしとされる「アメリカン・ドリーム」（金銭的大成功）という価値が階層を問わずすべての者を引きつけ、成功のための資源を持たない下層の者は制度的に許されざる手段を用いても成功しようとするとし、下層の犯罪をそこから説明した（Merton, 1957）。

この豊かさのアノミーを個人の態度としてとらえ、今回の調査データからアノミーと階層の関係について何らかの分析ができないだろうか。そのためにはまず、個人的な意味でのアノミーに関わるいくつかの指標について検討するところから始めなくてはならない。

調査には世帯所得についての次のような興味深い質問がある。すなわち「ゆとりのある生活をするために必要な収入は、税込みで1年間にどれくらいだとお考えですか」という世帯全体の収入についての問いがあり、それに対して金額で答えるようになっているのである。この問いへの回答を目標世帯収入と考え、それをアノミーの指標とすることは可能だろうか。

「ゆとりのある生活＝目標」と考えることを問題視しないならば、この指標は確かにアノミーを表す1つの指標になりうる。マートン流に「アメリカン・

ドリームの達成という目標が平等に分配されている」といった議論をする際には、この指標は確かに有効なのである。

しかし、アノミーをこの「目標値」だけで測定すると無理が生じることも多い。たとえば、「今の半分の 1000 万円の収入で十分だ」と思っている収入 2000 万円の者と、「1000 万円の収入がなくては」と考えている収入 500 万円の者を比べる場合、この指標では同じアノミー値になってしまう。しかし、おそらく、われわれの多くは前者を「豊かな現状に固執しない控えめな（アノミックでない）人物」と考え、後者を「豊かさをめざす野心的な（アノミックな）人物」と考える。われわれは現状と目標の違いの大きさを考慮してアノミー的かどうかを考えているのである。

しかし、現状と目標の違いだけでアノミックかどうかが決まるわけでもない。「2200 万円の収入がほしい」と思っている収入 2000 万円の者と、「400 万円の収入がほしい」と考える収入 200 万円の者とは差引額は変わらない。に

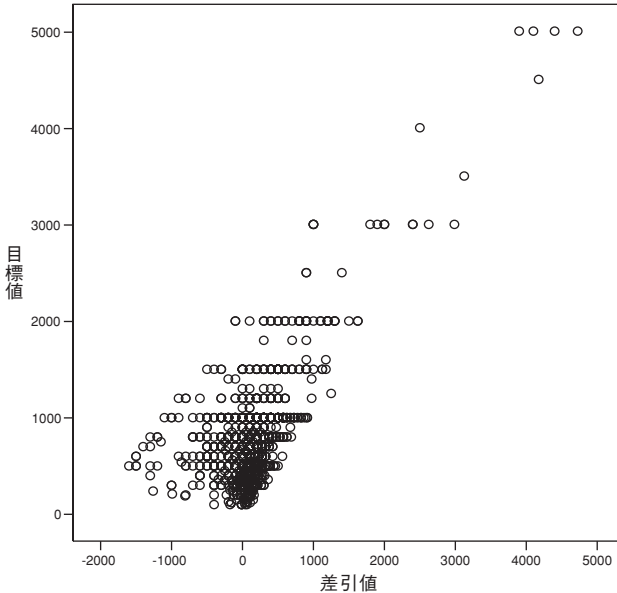


図 2 目標値と差引値の相関

もかかわらず、われわれは前者には「まだ必要ですか」と呆れ顔で聞きたくなくなり、後者には「そうですね」と同意したくなる。前者は後者に比べて「アノミックな高望みをしている」という判断がそこにはあるのだ。

結局、個人がアノミックかどうかは、その個人の（1）目標の絶対的な値と、（2）現状から目標までの（方向を考慮した）距離の双方に関わると考えるべきだろう。ところで、データでは、（1）必要世帯収入額（目標値）と、（2）必要世帯収入額と現実世帯収入額の差（差引値）の間の相関係数は 0.68 ($p=0.00$) とかなり高くなっている（図 2）。そこでここでは、（1）と（2）の重みつき合成得点をアノミー得点とすることにしよう。具体的には両者を主成分分析にかけ、その第 1 主成分の因子得点をアノミー得点とすることにする⁽⁸⁾。

5.2 アノミーと社会階層

この指標を用いて、まず、アノミーと経済階層・社会関係との関係について調べておこう。表 16 には経済階層・社会関係別のアノミー得点の平均が示され、表 17 にはその分散分析の結果が示されている。2つの表から、アノミーは経済階層には関わるが、社会関係には関係するとはいえないことがわかる。

表 16 経済階層・社会関係別アノミー平均

経済階層 3分	社会関係 2分	アノミー		
		平均	N	標準偏差
上	広	0.155	(237)	1.275
	狭	0.149	(180)	1.165
	合計	0.152	(417)	1.227
中	広	0.037	(230)	0.727
	狭	0.113	(179)	0.926
	合計	0.070	(409)	0.820
下	広	-0.175	(163)	0.810
	狭	-0.198	(233)	1.086
	合計	-0.188	(396)	0.981
合計	広	0.027	(630)	0.994
	狭	0.001	(592)	1.076
	合計	0.015	(1222)	1.034

表 17 経済階層・社会関係別，アノミー平均に関する分散分析表

			平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
アノミー	主効果	(結合された)	24.849	3	8.283	7.869	0.000
		経済階層 3 分	24.647	2	12.324	11.707	0.000
		社会関係 2 分	0.070	1	0.070	0.066	0.797
		経済階層 3 分 * 社会関係 2 分	0.553	2	0.276	0.262	0.769
	モデル残差合計	26.106	5	5.221	4.960	0.000	
		1280.059	1216	1.053			
		1306.165	1221	1.070			

アノミーが経済階層にどのように関わるのかをさらに詳しく調べるため、経済階層別にアノミー得点、目標値、差引値の平均を示したものが表 18 である。階層が高くなるとともに、目標値は高くなる一方、差引値のほうは小さくなっている。また、これらの総合得点であるアノミー得点は、階層の上昇とともに高くなっている。

表 18 の結果は読者にやや不思議な気持ちを抱かせるかもしれない。というのは、目標値と差引値には正のかなり高い相関があったのに (図 2)、表 18 の平均の値は目標値と差引値の間の負の相関を予想させるからである。

ここには実は次のようなからくりがある。図 3、図 4、図 5 にはそれぞれ、経済階層下、中、上での各ケースの目標値と差引値を表す点がプロットされて

表 18 社会階層別アノミー・目標値・差引値平均

経済階層 3 分		アノミー	目標値	差引値
上	平均値	0.152	1039.376	30.234
	度数	(417)	(417)	(417)
	標準偏差	1.227	583.075	573.465
中	平均値	0.070	782.714	197.139
	度数	(409)	(409)	(409)
	標準偏差	0.820	378.891	366.494
下	平均値	-0.188	520.939	218.477
	度数	(396)	(396)	(396)
	標準偏差	0.981	441.841	436.269
合計	平均値	0.015	785.468	147.099
	度数	(1222)	(1222)	(1222)
	標準偏差	1.034	521.222	475.032
p		0.000	0.000	0.000

共同性の精神的基盤と社会階層

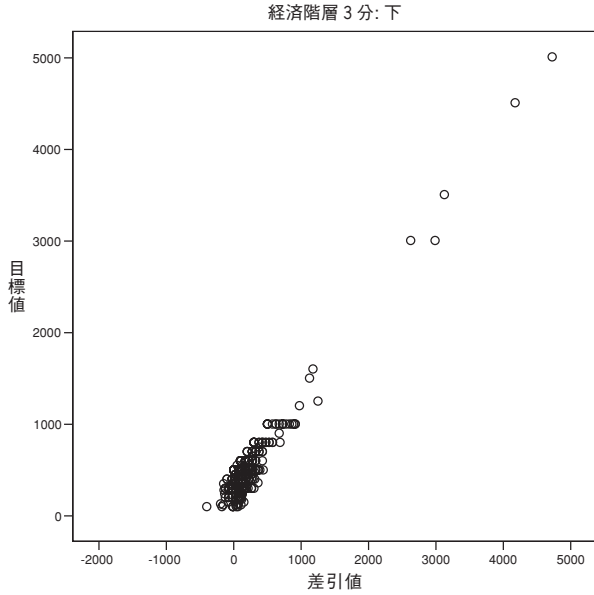


図3 経済階層「下」の目標値と差引値

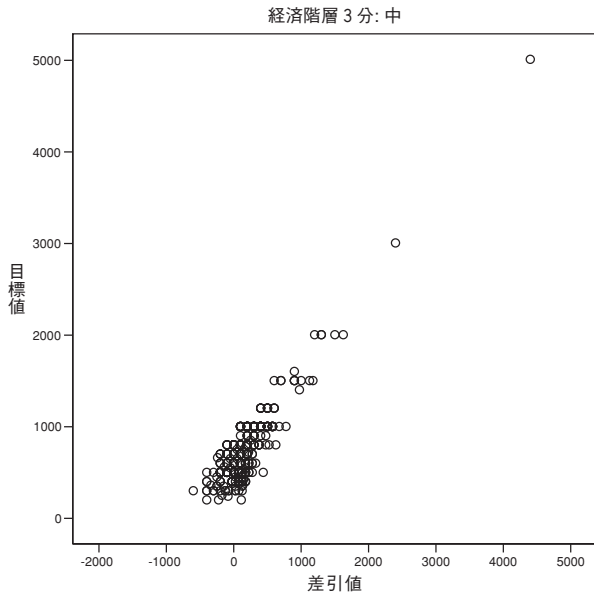


図4 経済階層「中」の目標値と差引値

共同性の精神的基盤と社会階層

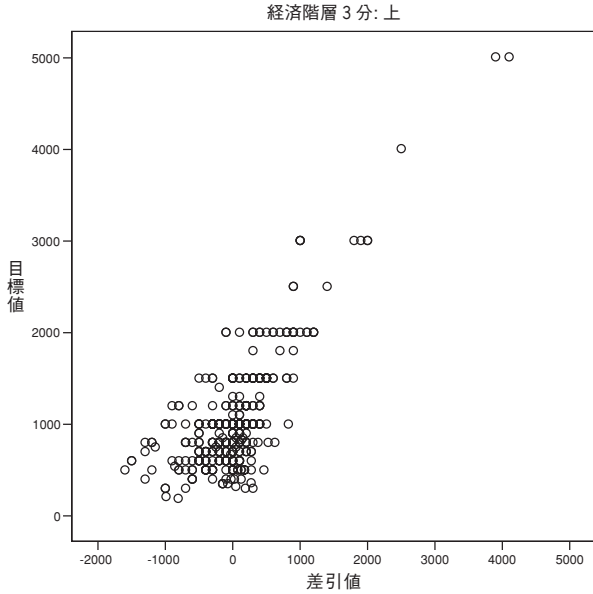


図5 経済階層「上」の目標値と差引値

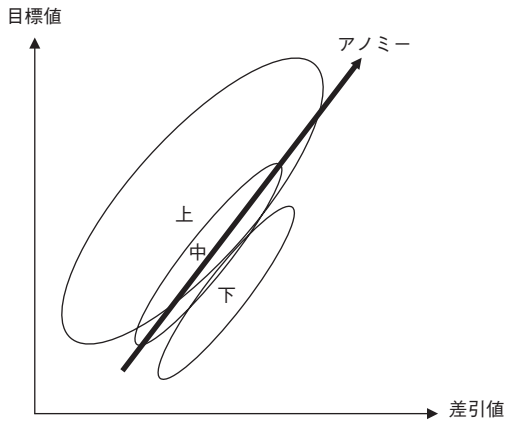


図6 社会階層・アノミー・目標値・差引値の関係

いる。これらを図式的にまとめると図6のようになる。図6の3つの楕円は上中下それぞれの階層での目標値・差引値の2次元の分布を指し、その平均は「上」「中」「下」という文字の位置で示されている。図を見るとわかるよう

に、目標値と差引値の間には相関がある。そして、目標値を表す縦軸には高いほうから順に（上から順に）上中下各階層の平均が並ぶ。差引値を表す横軸には高いほうから順に（右から順に）下中上の各階層の平均が並ぶ。ここで、アノミー軸は簡略化していうと図の斜め線のようにになる。これまた簡略化していうと、上中下各層の平均（上中下と書かれたところ）からこの斜め線に下ろした垂線の足がそれぞれの階層のアノミー得点の平均に対応する。アノミー得点の平均は高いものから順に（右上から順に）上中下と並ぶ⁽⁹⁾。したがって、目標値と差引値に正の相関があることと、表 18 のような結果が生じることは矛盾しないのである。

技術的な問題はさておき、分析結果の示す意味は大きい。どんな階層の者でも「ゆとりのある生活をするために必要な収入」の額を自由に設定することが出来る。にもかかわらず、実際には、豊かな者は高い額を設定し、貧しい者は低い額を設定しているのである。

かつてマートンは、アメリカ社会において「アメリカン・ドリーム」という目標は平等に分配されていると述べたが、現代日本社会において目標が平等に分配されているとはいいがたい。このことは、積極的な意味では社会全体がアノミックになっていないことを意味する。しかし、消極的にとらえれば「希望の格差」が存在していることを意味しているのである⁽¹⁰⁾。

5.3 アノミー、不満、信頼、配慮

さて、アノミーは他の意識とどのような関係をもっているのだろうか。経済的な階層がアノミーに関係することは確認されたので、それを前提に、これまで見てきた3つの意識との関係を見てみよう。

表 19 は、アノミー得点をサンプルが半数になるように高低に分けたものと経済階層を組み合わせ、それぞれについて生活不満、他者信頼、弱者配慮の得点を明らかにしたものであり、この分散分析結果は表 20 に示されている。

表からは、経済階層の高さだけでなくアノミックか否かということも生活不満に関連していることがわかる。豊かな層でも貧しい層でもアノミックな者

共同性の精神的基盤と社会階層

表 19 経済階層・アノミー区分別, 生活不満・他者信頼・弱者配慮平均

経済階層 3分	アノミー 2分	生活不満			他者信頼			弱者配慮		
		平均	N	標準偏差	平均	N	標準偏差	平均	N	標準偏差
上	高低	1.924	(249)	0.883	0.141	(240)	1.001	-0.276	(243)	0.966
		1.768	(168)	0.833	-0.041	(162)	0.974	-0.198	(163)	0.996
	合計	1.861	(417)	0.866	0.068	(402)	0.993	-0.245	(406)	0.978
中	高低	2.112	(249)	0.926	-0.025	(244)	1.008	-0.057	(240)	1.013
		2.081	(160)	1.040	0.034	(153)	0.926	-0.041	(154)	0.919
	合計	2.100	(409)	0.971	-0.002	(397)	0.976	-0.051	(394)	0.976
下	高低	2.639	(119)	1.307	-0.319	(117)	1.119	0.110	(109)	1.016
		2.471	(276)	1.164	-0.076	(267)	1.008	0.109	(255)	0.940
	合計	2.522	(395)	1.210	-0.150	(384)	1.047	0.109	(364)	0.962
合計	高低	2.138	(617)	1.027	-0.016	(601)	1.039	-0.116	(592)	1.003
		2.172	(604)	1.088	-0.037	(582)	0.977	-0.019	(572)	0.958
	合計	2.155	(1221)	1.057	-0.026	(1183)	1.009	-0.068	(1164)	0.982

表 20 経済階層・アノミー区分別, 生活不満・他者信頼・弱者配慮平均に関する分散分析表

			平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
生活不満	主効果	(結合された)	93.087	3	31.029	29.720	0.000
		経済階層 3分	92.690	2	46.345	44.389	0.000
		アノミー 2分	3.899	1	3.899	3.735	0.054
	2次交互作用	経済階層 3分 * アノミー 2分	1.081	2	0.541	0.518	0.596
		モデル	95.222	5	19.044	18.241	0.000
他者信頼	主効果	(結合された)	12.076	3	4.025	4.000	0.008
		経済階層 3分	11.964	2	5.982	5.944	0.003
		アノミー 2分	0.435	1	0.435	0.432	0.511
	2次交互作用	経済階層 3分 * アノミー 2分	8.107	2	4.053	4.028	0.018
		モデル	17.999	5	3.600	3.577	0.003
弱者配慮	主効果	(結合された)	23.732	3	7.911	8.356	0.000
		経済階層 3分	20.943	2	10.471	11.060	0.000
		アノミー 2分	0.256	1	0.256	0.271	0.603
	2次交互作用	経済階層 3分 * アノミー 2分	0.312	2	0.156	0.165	0.848
		モデル	24.923	5	4.985	5.265	0.000
残差	合計	1096.319	1158	0.947			
	合計	1121.242	1163	0.964			

は、同じ層のアノミックでない者よりも生活不満が高いのである⁽¹¹⁾。

他者への信頼と経済階層ならびにアノミーとの関係はやや複雑である。低階層でアノミックな者は同一階層の他の者よりも他者への信頼が低い。それに対して高階層でアノミックな者は同一階層のほかの者よりも他者への信頼が高くなるのである。

弱者への配慮とアノミーにはほとんど関係は見られない。そこに見られるのは、これまで見てきた経済的な階層との関係、すなわち、豊かな層ほど弱者への配慮を欠くという関係だけである。平均の表を見ると、アノミックな者とそうでない者の弱者への配慮の差が上層で際立っているが、それは統計的に有意とまではいえない。しかし、その差がいかなるものであれ、上層一般の弱者配慮得点の低さを考慮するとき、上層のアノミーは弱者への配慮を欠きつつも他者への信頼は高い「おめでたきアノミー」ということができるだろう。

6. おわりに

競争的な社会状況の進展の下、社会を支える人びとの意識はどのような状態にあるのか。このことを探るため、他者への信頼、弱者への配慮、不満、アノミーという4つの意識について社会階層との関係の検討がなされた。分析からは、貧しい者の他者への信頼の欠如、豊かな者の弱者への配慮の欠如、貧しい者の不満の高さが示された。

これらの結果を見て、われわれは、それらが理屈にあった合理的なものと考えよう。しかし、同時にこういった結果は絶望的な気分を生み出す。この絶望的な気分を救うものが社会関係という変数である。親密な社会関係は、いかなる階層であれ、他者への信頼を高め、弱者への配慮を高め、不満を低減させるのである。社会的連帯の重要性が確認できたといえよう。

一方、最後に分析されたアノミーは、経済階層、不満、信頼という変数に関連していたものの、弱者への配慮との関連は認められなかった。また、アノミーに対しては、社会関係が信頼や配慮や不満に対してもっていたような効力、

すなわち、社会関係がアノミーを引き下げるという効力は確認できなかった。

貧しい者のアノミーは他者への不信とともにあった。それは「シニカルなアノミー」とでもいえるだろう。対照的に、豊かな者のアノミーは他者への信頼とともにあった。しかし、この豊かな者の「他者を信頼した」アノミーは、弱者への配慮の欠如を伴うものであり、「おめでたきアノミー」とでもいえるものであった。

ソクラテスは忘れっぽいグラウコンにこう語りかける。「友よ、法というものの関心事は、国のなかの一部の種族だけが特別に幸福になるということではないのであって、国全体のうちにあまねく幸福を行きわたらせることをこそ、法は工夫するものだというを、また忘れたね？ 国民を説得や強制によって和合させ、めいめいが公共の福祉のために寄与することのできるような利益があれば、これをお互いに分かち合うようにさせるのが、法というものなのだ。法がみずからの国の内に彼らのようなすぐれた人々を作り出すのも、彼らを放任してめいめいの好むところに向かわせるためではなく、法自身が国の団結のために彼らを使うということのためなのだ」(Plato, 360 BC=1979 下：107-108)⁽¹²⁾。

もちろんプラトンの考えるような強制は危険きわまりない。しかし、豊かな者が、弱者への配慮を欠いたまま富を求め続けるのもまた、社会にとって危険きわまりないのである。

[付記]

本稿は、小林久高、2008「社会階層と共同性－他者への信頼・弱者への配慮・不満・アノミー」土場学編『2005年SSM調査シリーズ7－公共性と格差』2005年SSM調査研究会（科学研究費補助金特別推進研究16001001「現代日本階層システムの構造と変動に関する総合研究」成果報告書）に若干の修正を加えまとめたものである。なお、2005年SSM調査データの使用については2005年社会階層と社会移動調査研究会の許可を得た。

注

- (1) 世界各国で制度への信頼が時系列的に低下していることについては、Inglehart (1997) の Ch.10 を参照のこと。
- (2) 学歴における「大学」には、高専、短大、大学院卒・中退が含まれる。職業は SSM 職業大分類から、専門→専門、管理→管理、事務・販売→ホワイト、熟練・半熟練・非熟練→ブルー、農林→農業というように再構成されたものである。世帯収入および財産は、ケース数が等しくなるように全体を3分割してある。世帯収入は上限を2100万円、財産は上限を25000万円にしている。
- (3) 一般的信頼と種々の社会的属性との関係については、Yosano and Hayashi (2005) を参照されたい。
- (4) 弱者への配慮とほぼ同一の意味をもつ平等志向は、年齢との正の相関があり収入・学歴との負の相関があること、市部居住は平等志向を弱めることが指摘されている (小林, 2000)。
- (5) 親密性については、Habermas (1962), Giddens (1992), 齋藤 (2000) などを参照されたい。
- (6) 社会関係が一般的信頼にプラスの効果をもつことについては、Yosano and Hayashi (2005) に、より詳しい分析がある。
- (7) 社会関係は他者への信頼、弱者への配慮を強め、不満を弱めるだけでない。それは政治参加や社会参加を強める働きももっている (小林, 2002)。
- (8) 第1主成分で分散の84.0%を説明。アノミー得点は2変数を主成分分析にかけたときの第1主成分の標準化された因子得点なので、この得点はもとの両得点を標準得点にして加え、それをまた標準化した得点となる。
- (9) きちんというためには次のように図を描く必要がある。(1) 目標値と差引値を標準得点化して図を作る。(2) そこに45度線を引くとそれがアノミー軸になる。(3) アノミー軸に各ケースからの垂線の足を下ろす。その足の原点からの方向を考えた長さが標準化されていない第1因子得点になる。この長さはアノミー得点に「対応する」が、長さそのものがアノミー得点を表しているわけではない。(4) さらにその軸での分散が1になるように各ケースの因子得点を標準化すると、ここにいうアノミー得点になる。
- (10) この問題をさらに検討するためには、時系列的あるいは国際的な比較が不可欠である。今後の課題としたい。
- (11) ただし、全体を通してアノミックな者の不満がアノミックでない者の不満よりも高いとはいえない。それは、(1) 豊かな層にはアノミックな者が相対的に多いこと、(2) 豊かな層は貧しい層よりも不満が小さいことに起因する。
- (12) このプラトンのエリート観は、まるで本稿で見られた「学歴と弱者への配慮の負の相関」を批判しているかのようだ。

文献

- Bellah, R. N., R. Madsen, W. M. Sullivan, S. Swidler and S. M. Tipton, 1985, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press. (ベラー他『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』 島菌進・中村圭志訳, みすず書房, 1991)
- Dostoevsky, F., (Достоевский), 1869, *The Idiot*, (*Идиот*). (ドストエフスキー『白痴(上・下)』木村浩訳, 新潮文庫, 1970)
- Durkheim, E., 1897, *Le suicide*. (デュルケーム『自殺論』宮島喬訳, 中公文庫, 1985)
- Giddens, A., 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Stanford University Press. (ギデンズ『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』松尾精文・松川昭子訳, 而立書房, 1995)
- Habermas, J., 1962, *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. (ハーバーマース『公共性の構造転換—市民社会の категорияについての探究』細谷貞雄, 山田正行訳, 1994, 未来社)
- Hobbes, T., 1651, *Leviathan*. (ホッブズ『リヴァイアサン』水田洋訳, 岩波文庫, 1954)
- Hugo, V., 1862, *Les Misérables*. (ユゴー『レ・ミゼラブル(1~5)』佐藤萌訳, 新潮文庫, 1996)
- Inglehart, R., 1997, *Modernization and Postmodernization: Cultural, Economic and Political Change in 43 Societies*, Princeton University Press.
- 小林久高, 2000「政治イデオロギーは政治参加にどう影響するのか—現代日本における参加と平等のイデオロギー」海野道郎編『日本の階層システム2 公平感と政治意識』東京大学出版会: 173-193.
- 小林久高, 2002「漂流する政治意識」原純輔編『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房: 233-265.
- 小林久高, 2008「社会階層と共同性—他者への信頼・弱者への配慮・不満・アノミー」土場学編『2005年SSM調査シリーズ7—公共性と格差』2005年SSM調査研究会(科学研究費補助金特別推進研究16001001「現代日本階層システムの構造と変動に関する総合研究」成果報告書)
- Merton, R. K., 1957, *Social Theory and Social Structure* (revised ed.), Free Press (マートン『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961)
- Plato, (Πλάτων), 360 BC, *The Republic* (*Πολιτεία*). (プラトン『国家(上・下)』藤沢令夫訳, 岩波文庫, 1979)
- 齋藤純一, 2000『公共性』岩波書店
- Yosano, A. and N. Hayashi, 2005, “Social Stratification, Intermediary Groups and Creation of Trustfulness”, *Sociological Theory and Methods*, 20(1): 27-44. (『理論と方法』20(1): 27-44)

Trust in Others, Consideration for
the Poor, Discontent, and Anomie :
Social Stratification and the Attitudes
which Sustain Social Cooperation

Hisataka Kobayashi

Trust in others and considerations for the poor are both essential attitudes in sustaining social cooperation. Analyzing SSM data, we found that these attitudes are closely related to social stratification. People scoring 'high' on the scale of economic stratification trust others more than people who score low. Low scorers have more consideration for the poor than do high scorers. However, no matter where people appear on the scale, close and intimate social relationships increase attitudes of trust toward others and consideration for poor people.

Feelings of discontent in one's own life also relate to social stratification. People in a low position are less content than those scoring high. As with the attitudes of trust and consideration, having close relationships with others plays an important role here too, weakening this sense of discontent.

In this article a scale for measuring anomie (the desire for great wealth) is presented. By using this measure, several findings on the relationship between anomie and social stratification are considered. (1) The rich are more anomic than the poor in Japan. (2) Anomic people in a low position distrust others more than non-anomic people in the same position. (3) Anomic people in a high position trust others more than non-anomic people in the same position. Using the term 'naïve anomie' for high scorers in economic stratification who have little consideration for the poor, and 'cynical anomie' for low scorers to represent their distrust of others, this paper presents a concrete image of anomic man in our stratified society.

Key words and phrases : social stratification, social relationship, intimacy, cooperation, trust in others, consideration to the poor, discontent, anomie